

介護老人保健施設しおさい

症 例 概 要	ご利用者	: 80歳代・男性・要介護1
	利用期間	: 令和6年 6月～ 訪問リハビリを利用中
	病 名	: うつ病(30歳以前から)
	既往歴	: 高血圧(詳細不明)
	経 過	: 奥様と二人暮らし。要介護1でIADLは全て奥様がしている。30歳前からうつ病発症し50歳頃にうつ症状が重度になり、特にこの2年間は昼夜就床し、家から出ることは一切なくなったため、歩行能力が低下し、居室での転倒が度々みられる状態。食事以外の介助が必要になり、対人への拒否がみられるようになって来たことから要介護認定を受け、訪問リハビリを利用したことで、活動意欲と身体機能の向上が図れ、2年ぶりに屋外に出ることができ、通所リハビリテーションの利用へと繋がることになった症例。

内 容

ご本人は長年のうつ病により、この2年間、服薬も拒否され受診もできず、隣人や親戚との交流を嫌い、雨戸を閉めて、昼夜臥床しがちな生活を送っていました。外出を拒み歩行不安定による度重なる転倒。さらには意欲低下で入浴やトイレ動作もままならなくなりました。引きこもりによる機能低下や能力低下、さらには認知機能の低下により、会話では言葉が出てこない事も目立っていました。訪問リハビリではご本人から「歩けない」「何をしたら良いかわからない」などと不安を受け止め、「妻からは何か言うとも怒られるから怖い」「動けなくなったら困る」という不安や心配を伺いました。

ご本人やご家族のお気持ちを居宅のケアマネさんと共有し、まず始めに安心感を持っていただくよう日々の出来事や感じたことについて傾聴し、「～なのですね」と同じ言葉を繰り返しました。徐々に布団の中から応答されるようになり、硬くなった足腰に触れストレッチすることを受け入れられるようになりました。そこからは布団から出て起き上がりや立ち上がり、歩行練習などをトイレまで何度も行いました。

タオルを使って清拭練習や洗体練習を行い、徐々に手の届く範囲が広くなりました。服の表裏や前後ろを見て自力で着ることが可能になりました。トイレまで歩行器を使って一人で歩く事にも挑戦し「これあると楽だな」と、緩んだ表情でお話されるようになりました。それまで週に一度は転ばれていたとのことでしたが、訪問を開始してから約4ヶ月の間は転倒が発生していない事に、ご本人と奥様は安心され、自信と意欲が出てきました。

玄関での昇降や靴の脱ぎ履きを練習し、気持ちを高ぶらせてからの2年ぶりの散歩。強い日差しを浴び「暑いなあ～。まぶしいよ」と笑顔で話され、それまで夫に怒鳴られるのではないかと距離をとっていた奥

様が帽子を被らせながら「良かった。行ってらっしゃい」と笑顔で歩み寄られた場面は、奥様にとっても一つの転機になったのではないのでしょうか。

そして今では、積み重ねにより通所リハビリテーションにも通う事になり、ご利用者さん通しの交流を持てるようになったことは、多職種で連携したことでの老健としての使命を果たせた症例となりました。